

鄂爾泰論ノート

—— 鄂爾泰の雲南経営をめぐる研究状況・史料を中心にして ——

張 姍

はじめに 鄂爾泰と彼の雲南経営

鄂爾泰（一六八〇年¹—一七四五年）、字は毅庵、西林覺羅氏、清滿洲鑲藍旗人。曾祖父圖捫は清太宗天聰五年（一六三二）に征明軍に参加し、大凌河の戦において奮戦して戦死し、騎都尉を授けられた。祖父図彦図は官職を世襲し、戸部郎中までに至った。父鄂邦の官職は国子監祭酒に至った。鄂爾泰は幼少から漢文と滿文を兼習し、康熙三十八年（一六九九）の順天府郷試で挙人となった。同四十二年（一七〇三）、佐領を世襲し、三等侍衛を授けられた。同五十五年（一七一六）、内務府慎刑員外郎となった。雍正元年（一七二三）、雲南郷試副考官を経て、江蘇布政使に抜擢された。同三年

（一七二五）、奉旨入京し、「陛見」を受けた後、広西巡撫に昇進したが、同年、雲南巡撫管雲貴總督事に転任させられた。同四年（一七二六）、雲貴總督を实授され、兵部尚書銜を加えられた。同六年（一七二八）、雲南、貴州、広西三省總督に転任され、翌年、少保の加銜を得た。同十年（一七三二）、保和殿大学士を授けられて、兵部尚書を兼任し、軍機事務を処理した。同十一年（一七三三）、八旗通志總裁を担当して、吏部を兼署した。同十二年（一七三四）、鑲黃旗滿州都統を署理した。乾隆十年（一七四五）に卒し、諡は文端。すなわち鄂爾泰が十九歳で科挙に及第してから、六十五歳で没するまで、その官歴は四五五年間におよぶ²。康、雍、乾の三代に仕え、清朝初期を代表する政治家であった。

鄂爾泰の四十五年間の官途において、最もめざましい功績はなんと言っても西南少数民族地区で積極的に推進した「改土帰流」であり、それが雍正帝の最も期待したところでもあった。鄂爾泰の雲南滞在は雍正四年二月に雲南へ到着してから同九年十月に帰京するまでの約六年弱に及ぶ。その期間、彼は主に四川、貴州、雲南、広西の少数民族の事務を経営し、「剿」と「撫」^③を並用し、恩威をともに施して、西南少数民族地区の「改土帰流」を基本的に完成させた。同時に、鄂爾泰は農地の開拓を奨励し、水利工事を大々的に行い、文化教育を振興していった。彼の卓越した才能は雍正帝の深く賞賛するところとなり、彼は雍正朝においてもっとも寵用された大官の一人となった。雍正帝は鄂爾泰の雲南経営について「雲、貴、広西三省はみな辺境である。彝土人（少数民族）は横暴不法で、これまで整頓がなされてこなかった。朕は鄂爾泰と二人でこれに対処し、数年来、彼の心を尽くした計画と力をこめた処理で、近來各所の彝疆（少数民族地区）は次第に整頓され、既に軌道に乗ってきた。もし鄂爾泰でなければ、余人では断じてこのように処理することを考えられなかったし、できもしなかったであろう。現在既に効果が現れており、もし鄂爾泰がそこでさらに一二年間経営すれば、各彝人（少数民族

族）が清朝に帰することはいよいよ深く、法を奉ることによりよつとめて、内地と同じく永遠に安穩になるであろう。」^④と述べた。ここからも鄂爾泰の雲南経営に対して、雍正帝の高い評価が見て取れる。なお、本文が検討していく鄂爾泰の「雲南経営」の範囲は雲南だけではなく、彼の雲南滞在期間中に「改土帰流」が実行された西南地区全体であり、つまり、貴州、雲南、広西と四川、湖広などの一部分の広い地域を含むことを指摘しておかなければならない。

一、問題の提出

中国西南地区、特に雲南は、古來少数民族の集中する地区である。明代からそこで行われた「改土帰流」の対象は主にこれらの少数民族の土司であり、また大規模な「改土帰流」が実行されたのは清朝雍正時期であった。そして鄂爾泰は「改土帰流」の政策実行の立て役者であった。ではその当時、西南地区における少数民族の分布、發展状況はどのようなものであつただろうか。同じく少数民族——滿洲族出身の鄂爾泰の少数民族観はいかなるものであつただろうか。雲貴広西の統治期間において、鄂爾泰は各種少数民族にどのように対処したの

だろうか。これまでの研究もこれらの問題に部分的に触れてはいるが、依然として大きな研究の余地が残されている。それについて、筆者は今後の研究において詳細に検討しようと考えているが、まずこの研究ノートにおいてこれまでの学界における鄂爾泰に関する研究状況と、そこで利用されている研究史料について整理をおこないたい。

二、研究状況

鄂爾泰は清朝初期を代表する政治家で、雍正帝の寵臣の一人であり、中国西南の「改土帰流」に敏腕を振るった人物として、これまでも彼についての研究論文や著作は少なからずあり、特に彼が雲南で行った「改土帰流」については専門論文もある。これらの論文を見渡すと、主に中央王朝の辺境に対する経営の角度から、鄂爾泰の西南少数民族地域の経営を検討している。今までの鄂爾泰についての研究状況をいっそう理解し、さらに研究を展開していくために、筆者は中国、日本の学界の関連する研究成果を整理し、問題関心の違いによって分類し、以下に列挙する。

(一) 「改土帰流」について

鄂爾泰の一生における最大の政治的業績として、「改土帰流」は中央王朝の地方管理と辺境統治の強化にとどまらず、中国西南地区少数民族の発展の歴史、あるいは中国統一多民族国家を形成し、これを強固にしていく上でも、きわめて重要な意味がある。鄂爾泰は「改土帰流」の提案者であるばかりでなく執行者でもあり、彼がこれに携わった期間は約六年弱に及ぶ。「改土帰流」とは土司制度を流官統治に改めるということを意味する。土司は現地の少数民族の首領であり、世襲することができるのに対し、流官は中央政府が任命派遣され、世襲することができない。すなわち改土帰流とは土司を挟んでの間接統治から中央による直接統治へと移行することであった。改土帰流は明朝においてすでに始まっていたが、西南地域で大規模に展開されたのは主に清朝の雍正期である。雍正四年から雍正九年まで、つまり鄂爾泰の雲南在任期間中の「雲南、貴州、広西の改土帰流が土司を廃止し、流官を新しく設立した数の多さや関連する地域・民族の範囲の広さは、それ以前のいかなる時期とも比較にならない。」⁵⁾それゆえ、鄂爾泰に関する研究において、改土帰流は欠かすことのできない内容である。

まず、直接に鄂爾泰の改土帰流を論題とする論文の中で、馮爾康「鄂爾泰与改土帰流」(『文史知識』一九八三年第七期)は比較的早いものであり、鄂爾泰の性格と見識、土司制の弊害と改土帰流の建議の提出、改土帰流の実施過程を論述し、改土帰流の積極的な意義を肯定し、鄂爾泰を見識と偉業ある政治家と認めている。その後、王纓「鄂爾泰與西南地区的改土帰流」(『清史研究』一九九五年第二期)は雍正期の改土帰流の背景と必要性、鄂爾泰が改土帰流政策を立案・実施する過程、鄂爾泰が西南で行った社会改革をさらに詳しく述べ、それに対して高い評価を与え、それが康・雍・乾時代の国力鼎盛期のために条件を準備するだけでなく、広大な中国西南部をより一層中華民族の共同発展の歴史軌道に編入することができたと指摘している。これ以後、関連する論文にはたとえば、劉本軍「震動与回響——鄂爾泰在西南」(雲南大学一九九九年博士論文)、「鄂爾泰改土帰流的善後措施」(『雲南社会科学』一九九九年第六期)、「論鄂爾泰改土帰流的原則和策略——兼对『江外宜土不宜流、江内宜流不宜土』說質疑」(『思想戦線』二〇〇一年第二期)、李若愚「從化外到化内——鄂爾泰在西南地区的改土帰流」(『民族社会学研究通訊』第四十期、二〇〇六年十二月)、劉興「鄂爾泰在西南地

区推行改土帰流」(『西部時報』二〇一〇年三月十六日)などがある。その中で、言及しなくてはならないのは劉本軍が鄂爾泰の西南統治に対して行った一連の研究である。氏の博士論文「震動与回響——鄂爾泰在西南」^⑥は鄂爾泰と改土帰流、鄂爾泰の開拓苗疆、鄂爾泰と雲南水利の三つの問題を扱う。氏自身が序論で言うように、この論文は鄂爾泰に対して系統的な分析と研究を行って研究史の空白を埋めた作だと呼ぶことができる。この論文はまず、以前の研究が改土帰流と開拓苗疆を混同しているという誤った認識を指摘し、いまだ中央政府の統治範囲に入っていない苗疆地域にはそもそも土司が存在しないため、改土帰流と呼ぶことはできず、両者を区分した上で、それぞれ研究と評価を行うべきであると主張している。次に、氏は鄂爾泰が雍正年間の西南地區における改土帰流の鍵となる人物であり、雍正帝と比べてさえ彼の役割のほうがより重大であると見なし、さらに魏源『聖武記』雍正西南夷改流記中の鄂爾泰の「改土帰流疎」を考証している。そして従来すべての研究者が認めてきた「江外宜土不宜流、江内宜流不宜土」説を、鄂爾泰は改土帰流中に実行したことがないと指摘している。同時に、この論文は一連の詳細かつ具体的史実を通して、鄂爾泰の改土帰流、開拓苗疆、対苗政

策の転換、西南水利事業の振興について、客観的、具体的な記述と評価を試みる。その他、この論文の価値の一つは、「付録一」で従来の雍正改土帰流、開拓苗疆、雲南水利と関連する論文と他の研究成果を全面的に収集して分類し、詳しい論述を行っていることである。たとえば雍正朝の改土帰流について、条件、原因、目的、方法、善後措置、作用の六つの角度から、それぞれ先人の研究観点が述べられており、以後の研究者に研究動態を理解し、関連する研究を展開する際の便宜を与えている。また、劉本軍の他の二篇の関連する論文「鄂爾泰改土帰流の善後措施」と「論鄂爾泰改土帰流の原則和策略——兼对『江外宜土不宜流、江内宜流不宜土』說質疑」はこの博士論文に基づいて発展させたものと言える。劉本軍の研究の後、李若愚「從化外到化内——鄂爾泰在西南地区的改土帰流」は「中華民族多元一体格局」の視点から鄂爾泰の改土帰流を分析している。劉興「鄂爾泰在西南地区推行改土帰流」は鄂爾泰の改土帰流の過程を叙述する以外に、彼の生涯の略歴についても論及している。

次に、鄂爾泰は改土帰流を推進する期間に、雲南巡撫、雲貴総督、雲南・貴州・広西三省総督を担当したので、雲南滞在の時間が最も長い。それゆえ、鄂爾泰と雲南についての研

究論文も少なくない。神戸輝夫「鄂爾泰と雲南」(『史学論叢』第二十一号、別府大学史学研究会、一九九〇年)は「宮中檔雍正朝奏摺」¹⁾中の鄂爾泰と雍正帝の硃批奏摺を利用し、二人の關係に着目することから、鄂爾泰が雲南郷試副主考を担任してから、雲南巡撫に任命されて雲南へ赴任する過程を述べ、彼の雲南統治における措置、特に鎮沅土府の帰流について説明し、同時に劉洪度の殺害事件を分析し、最後に鄂爾泰の離滇を述べている。鄂爾泰の改土帰流は拔群の功績であり、雍正帝の高い評価を得たが、少数民族との矛盾を真の意味で解決してはおらず、ある場合には適切さを欠いた行為のために、かえって少数民族の抵抗を引き起こして彼らを奮い立たせることもあった、としている。森永恭代「清代雍正期における鄂爾泰の雲南経営——改土帰流と地域開發」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』史学編第六号、二〇〇七年)は鄂爾泰が雲南在任中に開始した金沙江開墾工事の意義を見直す一つの視点として、土司制度と改土帰流の実行から、明清時代において中央政府の雲南に対する統治の変遷を述べており、さらに雍正期における西南地区の改土帰流の時代背景および鄂爾泰の雲南経営の政策を重点的に分析し、改土帰流と並行して施行された農地開墾、鉞山開發、水利事業、交通網

整備などの措置が清朝政府の雲南経営を固めることになったと指摘している。張鑫昌・李興福「鄂爾泰奏折与雲南改土歸流」〔檔案學通訊〕二〇〇八年第一期、「鄂爾泰奏折与雲南改土歸流續」〔檔案學通訊〕二〇〇八年第二期〕は「清朝皇帝御批奏事珍檔」を重点的に利用し、同時に四庫全書、詔令類及び「硃批諭旨」を利用して、鄂爾泰の奏摺から彼が雲南で行った改土歸流を研究し評価している。その進歩的な作用を肯定する以外に、改土歸流中に少数民族に実行された適切でない措置という欠点も指摘されている。それ以前の鄂爾泰についての研究もすべて鄂爾泰の奏摺を利用しているが、しかしそれを単に史料根拠として用いることが多く、この二篇の論文のように奏摺の記述自体を直接に問題点とする研究は中国大陸でまだあまり例がない。鄂爾泰の奏摺について言及すれば、数量が多く、内容もきわめて詳細であるため、鄂爾泰の雲南経営について研究する際の一次史料であると同時に、雍正時期の奏摺制度を研究する際にも重要な参考史料だと言えることができる。たとえば台湾の莊吉發「從鄂爾泰已錄奏摺談『硃批諭旨』的刪改」〔清史論集〕文史哲出版社、二〇〇三年〕はこれに関する専論である。これについては後の「研究史料」の章節で詳しい論述を行うので、ここでは贅言しない。

同時に、鄂爾泰は西南地区における改土歸流実行の立て役者であったから、鄂爾泰その人の直接的な研究以外にも、多くの改土歸流研究が彼について言及している。代表的な論文には以下のようなものがある。王鍾翰「雍正西南改土歸流始末」〔文史〕第十輯、中華書局、一九八〇年〕は雍正年間に実行された改土歸流の背景、政策、具体的な過程及び得失を述べ、さらに鄂爾泰の改土歸流にせよ、またその後の宿駅の開設、河道の浚渫、開墾の重視などの措置にせよ、すべての目的は清政府が西南地区において政治、経済、文化に対する直接的な統治を確立することにあつたと指摘している。改土歸流中に鄂爾泰は少数民族を残酷に鎮圧し、殺戮した事実も列挙されるが、長期の歴史的效果と中国という統一多民族国家の角度から見れば、改土歸流には進歩的な意義があつたと総括的に指摘されている。これより先に、江応梁「略論雲南土司制度」〔學術研究（雲南）〕一九六三年第五期〕は鄂爾泰の改土歸流について、進歩的な意義は少なく、地方の生産を破壊し、民族間の敵視をもたらしたと主張している。張捷夫「關於雍正西南改土歸流的幾個問題」〔清史論叢〕第五輯、中華書局、一九八四年〕は学术界で鄂爾泰の改土歸流について評価が分かれる現象に対して、当時の状況と具体的経過に

基づいて、原因結果を明確にして再び判断するべきであると主張している。さらに雍正改土帰流中の三度の大規模な用兵事件を例として、歴史の舞台から退出することを肯んじない土司達の抵抗は正義だと言えないばかりか、農民蜂起と混同することもできず、改土帰流中に出現した新たな矛盾であり、その後、鄂爾泰の善後措置が改土帰流の成果を一段と固めさせたと指摘している。李世愉「清雍正朝改土帰流善後措施初探」(『民族研究』一九八四年、第三期)は鄂爾泰個人が果た役割を肯定すると同時に、大規模な改土帰流を雍正期に行うことができたのには、一連の客観的な要因があると指摘している。たとえば、「西南地区と内地の連絡が更に密接になり、土民と土司との対立が日一日と激化し、中央政権と土司の矛盾が日に日に先鋭化し、改土帰流の呼び声はますます高くなっていった、(一方で)その時清朝は全国の統一を基本的に実現し、経済発展が国庫を日に日に充実させていた」ということが述べられている。他に、鄂爾泰の改土帰流の過程と作用に触れている論文は、陳権清「明清改土帰流述略」(『湖南師範大学社会科学学報』一九八三年第二期)、羅友林「評雍正時期的『改土帰流』」(『貴州民族学院学報(哲学社会科学版)』一九八七年第三期)、歐陽熙「略論雍正時期对西南地

区的『改土帰流』」(『広州師院学報』一九八九年第二期)、関漢華「論明清兩代的改土帰流」(『華南師範大学学報(社会科学版)』一九九〇年第三期)、周宗瑾「鄂爾泰在滇政績述評」(『雲南文史叢刊』一九九一年第二期)、陳怡「評雍正時期西南地区『改土帰流』の歴史作用」(『黑龍江農墾師専門学報』二〇〇一年第二期)、秦中応「建国以来關於『改土帰流』問題研究綜述」(『辺疆經濟與文化』二〇〇五年第六期)などがある。

最後に、西南地区の面積が広大であるため、地域的な改土帰流についての研究中で、鄂爾泰に触れている論文と論著もある。たとえば、張永国「略論貴州『改土帰流』的特点」(『貴州文史叢刊』一九八一年第三期)、覃樹冠「清代広西の改土帰流」(『広西師範大学学報』一九八五年第一期)、劉東海「雍正朝在鄂西的改土帰流」(『鄂西大学学报(社会科学版)』一九八七年第四期)、曹相「清朝雍正年間滇西南地区的改土帰流」(『雲南師範大学学報(哲学社会科学版)』一九九七年第一期)、周朝雲「『改土帰流』在昭通」(『昭通師專学報』一九九八年Z1期)などである。同時に、改土帰流と土司制度は緊密な関係があるため、多くの土司制度についての研究も鄂爾泰に触れている。代表する論者は呉永章『中国土司制

度淵源與發展史」(四川民族出版社、一九八八年)、龔蔭『中國土司制度』(雲南民族出版社、一九九二年)、李世愉『清代土司制度論考』(中國社會科學出版社、一九九八年)などである。論文は非常に多く、限られた紙数で全てを列挙することができないため、具体的には賈霄鋒、王力「近百年來中國土司制度的史料整理及研究綜述」(『青海民族研究』二〇〇三年第三期)、賈霄鋒「二十多年來土司制度研究綜述」(『中國边疆史地研究』二〇〇四年第四期)の二篇の綜括を参照されたい。

(二) 中央王朝の地方經營について

清代の統治者は内地の抵抗闘争を鎮圧し、「三藩」と噶爾丹(ガルダン)の武装反乱を平定し、台湾を回復した後、ほぼ全国の統一を実現した。この時、広大な辺境地区をどのように管理したのだろうか。これまで学界は改土帰流を起点として、鄂爾泰に関する研究を以上のように総括してきた。一方で、清代の西南經營全般についての研究論文の中に、鄂爾泰に触れているものもある。最も代表的なのは李世愉「清政府對雲南的管理与控制」(『中國边疆史地研究』二〇〇〇年第四期)、林建會「清朝前期完善貴州省建置、開辟『苗疆』及其影響」(『貴

州民族研究』一九九二年第二期)である。「清政府對雲南的管理与控制」は、清政府による辺境地区の管理は歴代より嚴格であったが、その中でも雲貴が重点であり、特に雲南土司の問題が重要であると指摘している。鄂爾泰の改土帰流の後、清政府は辺防要地の統制、良吏の選択、土人(少数民族)を統制して「国法」を知らしめることによって、雲南ないし西南地域の統治を強化することができたと述べている。「清朝前期完善貴州省建置、開辟『苗疆』及其影響」は貴州各地の行政制度が完備されたのは清代前期であり、明代の改土帰流と清初に順次おこなわれた整頓のため、鄂爾泰が西南地区で改土帰流を強力に推進した時点で、貴州では四大土司だけではなく、多くの中小土司の改土帰流が既に完成されていたと主張している。したがって鄂爾泰が貴州で主におこなったのは開拓「苗疆」(当時は「新疆」と呼ばれ、今の貴州と湖南、広西、雲南の省境を指す)であり、最初、「計略をもって虜とするを上策とし、軍をもって討伐するを下策とする。自ら投降させるを上策とし、投降を強要するを下策とする」との方針を提出したが、しかし苗疆の少数民族に対する差別觀念および現地人民の抵抗のため、彼の政策は血生臭い弾圧に變化した。それでも、清初の開拓苗疆は客觀的には貴州の政治、

経済、文化の発展と各民族の交流を促進したと言っている。その他、李成鼎「平定三藩後清朝對雲南の治理」(『雲南日報』二二〇三年十月六日)、趙葆惠「清代前期對貴州の治理與開發」(『韓山師範學院學報』二〇〇一年、第三期) などがある。

(三) 少数民族への対処について

西南地区は少数民族集居地区であり、改土帰流にせよ開拓苗疆にせよ、対象となるのは少数民族である。そのため、上文で言及した研究は多かれ少なかれ少数民族に触れている。しかし、鄂爾泰の民族観と民族政策をいっそう明確に理解するために、特に民族を視点とする研究を単独で総括し、以下に列挙する。

上文で言及した「雍正西南改土帰流始末」中の「西南三省少数民族之分類」は鄂爾泰が西南経営をおこなった当時の民族情況についての、これまでは比較的全面的で詳細な考証と論述であると言える。この論文は範承勳等纂『雲南通志』、金鉞等纂『廣西通志』、鄂爾泰等纂『貴州通志』の記載によって、三省の少数民族の名称、所屬、所在地などの情況をそれぞれ述べており、「西南三省の少数民族の名称はきわめて多いが、大まかに言えば、雲南は彝、保羅、貴州は苗、廣西は壮であ

る。」と言われている。李恩軍「評清朝『改土帰流』民族政策」(『滿族研究』一九九〇年第二期) は鄂爾泰が西南少数民族地区で改土帰流を行う中で、異なる情況に基づいて三つの方法を創造した、すなわち(1) 純粹な武力征伐と軍事進撃、(2) 情況の違いによって異なる対処を行う、(3) 軍事實力を後盾にした剿撫の並用であると言っている。張岳奇「鄂爾泰對黔東南苗族用兵史実」(『貴州文史叢刊』一九八六年第一期) は鄂爾泰が苗疆を開拓する過程中の用兵の経過を述べており、功名心にとらわれた鄂爾泰が誤って武力鎮圧を採用し、貴州東南の苗族人民に重い災難をもたらし、同時に苗族人民から強烈に抵抗を受けて、最終的に彼の爵位もそのため削られたと述べている。筆者はこの文章における「苗族」の指す内容が正確であるかどうかについてはさらに議論が必要であり、当時少数民族の総称として用いられた「苗」と今の「苗族」との間にはやはり区別があると考ええる。馬国君「論雍正朝開辟黔東南苗疆政策的演變」(『清史研究』二〇〇七年第四期) は雍正時期に苗疆を開拓する過程において、方頭を代表とする「主撫派」と鄂爾泰、張広泗を代表とする「主剿派」が苗疆の異なる地区で撫、剿を同時に行っていたため、決して「撫—剿—撫」あるいは「先撫後剿」ではなかったと主張しており、

主撫派は重大な抵抗を受けることがほとんどなく順調に進捗したのに対し、主剿派は現地の文化習俗の特殊性を無視して武力を盲信し、戦功を争い、人民の生命を踏みじり、最後に苗民の抵抗のために策略を変えなければならなかったと述べている。開拓苗疆の過程における代表的な事件である長寨事件について、関連する研究は羅康隆「試論長寨事件的性質」(『貴州文史叢刊』、一九九三年、第四期)がある。長寨地区には土司がおらず、経済、文化が日に日に発展し、民族関係も融合が進みつつあった。それゆえ、長寨事件と雲南、貴州東南地域で鄂爾泰が行った用兵の性質とははっきり異なっている。即位後間もない雍正帝が鄂爾泰の長寨攻撃を支持した原因は決してもっぱら境域内を守護し、民力を養うことにならためではなく、それによって自分の威信を確立し、自分の統治を強化しようとするものであり、鄂爾泰が率いた清兵は村寨を焼いて破壊し、殺人略奪を行い、悪事の限りを尽くして現地の苗族、布依族の大衆に重い災難をもたらしたと指摘している。この論文には注釈、引用がなく、その推測と結論については必ずしも賛同できない部分も多い。長寨事件と関連する奏摺資料について、哈恩忠「雍正初年鎮庄長寨苗民史料(上)」(『歴史檔案』二〇〇八年第三期)、「雍正初年鎮庄

長寨苗民史料(下)」(『歴史檔案』二〇〇八年第四期)は中国第一歴史檔案館が所蔵する宮中、軍機処などの檔案史料全体から関連する奏摺を整理して編集しており、鄂爾泰の奏摺も含まれている。胡積徳「清朝盤江流域布依族地区改土帰流与領主経済向地主経済的転化」(『貴州民族研究』一九八二年第三期)は経済形態の角度から貴州盤江流域における布依族の改土帰流を研究する。神戸輝夫「清代雍正朝期の少数民族統治について…貴州省仲家苗を中心に」(『大分大学教育学部研究紀要』第十七巻二号、一九九五年)は貴州省仲家苗に対する鄂爾泰の武力勦捕政策の実施について述べ、その後には貴州、広西の苗族に対する大規模な改土帰流が始まったことを指摘している。鄂爾泰の開拓苗疆について前掲の「震動與回響—鄂爾泰在西南」に詳しい叙述があり、さらに前人の観点を総括しているため、そこに言及された論文については再度取り上げる必要はないだろう。

「苗疆」以外の少数民族についての研究については、たとえば李虎「清初壮族地区的改土帰流及其影響」(『百色学院学报』二〇〇七年第三期)は壮族地区で行われた改土帰流の背景、過程、作用などを述べ、鄂爾泰の時期に壮族地区の改土帰流がほぼ完成され、壮族の政治、経済、文化の発展に深い

影響を与えたと主張している。石邦彦「清朝湘西少数民族地区的改土帰流」(『吉首大学学报』一九八七年第二期)は社会的背景、実施過程、手段、意義の四つの方面から湘西の少数民族地区における改土帰流を述べており、その中で土家族の集居地区における改土帰流は雍正四年に鄂爾泰の提案が認可されてからはじまり、雍正七年に完成された。苗族の集居地区における改土帰流は康熙四十二年から始まり、雍正八年に完成された。胡慶鈞「清初以来彝族的土司制度与改土帰流」(『明清彝族社会史論叢』上海人民出版社、一九八一年)は鄂爾泰の血生臭い虐殺が鎮雄、烏蒙、東川などですみやかに改土帰流を成功させたが、しかし建昌、涼山、雷波などの彝族地区における改土帰流はおおむね失敗したと述べている。鎮雄、烏蒙、東川地区の改土帰流については、神戸輝夫の一連の研究論文がある。「清代雍正朝期の改土帰流政策―烏蒙・鎮雄両土府の場合」(『大分大学教育学部研究紀要』第十五卷二号、一九九三年)は『明清彝族社会史論叢』の記述を参考にし、『宮中檔雍正朝奏摺』を利用して烏蒙・鎮雄の改土帰流を概述する中で、雍正帝が内地で一貫して主張した「先恩後威」の政策と違い、烏蒙・鎮雄に対して雍正帝及び鄂爾泰は「先威後恩」の政策を主張して実行したことが指摘されて

おり、それによって、二人の少数民族政策を體現することができると述べている。また「清代雍正朝期の少数民族統治について―改土帰流後の烏蒙府を中心に」(『大分大学教育学部研究紀要』第十六卷一号、一九九四年)は烏蒙地区の彝族の抵抗の具体的事例を示し、清代の少数民族政策を分析した。それ以外に、この二篇の論文は鄂爾泰と岳鍾琪の矛盾、及び二人の矛盾の処理における雍正帝の鄂爾泰に対する支持についても触れている。さらに「清代雲南省武定県彝族那氏土司の活動について」(『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第二十四卷二号、二〇〇二年)は『清代武定彝族那氏土司檔案史料校編』⁹⁾にもとづいて雍正年間的那徳宏を代表とする武定彝族那氏土司の政治、経済活動を分析し、その中で那氏土司は彝族地区、特に烏蒙における清政府の改土帰流に協力したことを重点的に述べる。それは鄂爾泰が提出した「以彝制彝」という政策を體現するものであり、那氏土司は改土帰流に対する擁護と協力によって、烏蒙の戦後中央政府から奨励を受けたと述べている。

(四) 水利、経済、人身売買の処理及びその他

鄂爾泰が西南経営に当たっている期間、改土帰流と開拓苗

疆の進展に歩調を合わせるようにして、他の多くの措置を展開した。

まず水利の方面について、樊西寧「鄂爾泰与雲南水利」(『中国水利』一九八四年第三期)は鄂爾泰の雲南水利事業に対する比較的早い研究であり、彼の水利思想と建設実践を初歩的に検討した。劉本軍「鄂爾泰与西南少数民族地区的水利建設」(『思想戦線』一九九八年第十期)は鄂爾泰の西南水利に対する認識、措置、成果の三つの方面からさらに詳細で踏み込んだ研究を行い、同時にこの文章は彼の博士論文「震動與回響——鄂爾泰在西南」の一章として収録された。その後、梁盼「鄂爾泰与雲南治水」(『中国水利』二〇〇六年第十四期)は鄂爾泰が雲南で行った農業治水、交通水運の治水を述べ、これらの措置が雲南と周辺省における社会経済の発展を強力に推進したと主張している。郭玉富「清雍正年間滇中及滇南地区的水利治理」(『雲南民族大学学报(哲学社会科学版)』二〇〇九年第五期)は各県ごとに、鄂爾泰が在任中に雲南中部と南部で行った水利建設を重点的に述べ、彼の水利事業が耕地を灌漑して農業の発展を促進し、さらに水路の交通を開拓して雲南と広東・広西の商業往來を促進したと指摘している。

次に経済の方面について、范同寿「鄂爾泰及其經濟活動淺析」(『貴州社会科学』一九八四年第三期)は鄂爾泰が雲南で推進した水利工事、農耕奨励、交通改善、塩鉱の整理などの經濟活動を述べ、さらに鄂爾泰の階級属性の角度から彼の分析と評価を行った。張明富「鄂爾泰与雲貴辺省經濟開發」(『東北師大学報(哲学社会科学版)』一九九四年第五期)は鄂爾泰の辺境開發戰略を分析し、農田の開墾による農業の発展、鉞山の開採、道路や河川の整備による交通の発展という三つの方面から彼の經濟開發の具体的な措置を述べ、彼が經濟建設で取得した業績は、彼の政治的功績と比較しても少しも見劣りしないと主張している。

さらに人身売買の規正について、哈恩忠は「略論雍正年間清政府对貴州販賣人口的整飭——以鄂爾泰打擊川販為中心」(『貴州文史叢刊』二〇〇六年第二期)及び「鉄拳出擊——二百年前鄂爾泰在貴州懲治人販子」(『中国檔案報』二〇〇四年十月八日第〇〇一版)で雍正時期に貴州で人身売買に従事しながら機会に乗じて苗民を惑わす「川販」(四川の行商)の存在を可能にした原因と条件、および鄂爾泰のそれに対する認識の変化について分析をおこない、雍正四年(一七二六)と雍正七年(一七二九)において鄂爾泰が川販に対して行っ

た集中的な取り締りを重点的に述べている。それは一定の効果を得たが、長期性、持続性、秘匿性、多様な形式をそなえた人身売買を徹底的に取り除くことはできなかったと指摘している。張中奎は「略論清朝政府嚴禁西南人口販賣政策之流變——以『改土歸流』前後の貴州為例」（『貴州文史叢刊』二〇〇五年第三期）、「論清代前期貴州苗疆人口販賣屢禁不止的原因」（『中南民族大学学报』人文社会科学版、二〇〇九年第二期）の二篇において鄂爾泰が貴州で川販に実行した取り締り及び清政府が人口販賣を嚴禁する政策の「禁」、「縦」の変化について分析を行い、外部環境・政策変化・貴州の流官の腐敗・諸苗の「銃殺氣風」の四つの点から何度禁止しても人身売買が止まない原因を総括している。

上述の三つの点以外に、総体的に鄂爾泰に対して研究と評価を行う論文には、王纓「試述鄂爾泰对西南的社会改革」（『中国歴史博物館館刊』一九九五年第二期）、趙秉忠「論枢臣鄂爾泰」（『遼寧師範大学学报』一九九七年第三期）、吳光範「清朝鄂爾泰治滇史評」（『雲南日報』二〇〇二年十二月二十六日）などがある。

ここまで述べてきた研究成果を見渡すと、従来の鄂爾泰についての研究は主に「改土歸流」に関するものである。多く

の研究が改土歸流の背景、過程、目的、影響、評価などを扱っており、いくつかの論点、たとえば改土歸流の背景、目的などに関しては、すでに基本的な議論の一致を見ている。しかし、その影響と評価については、論者によって角度や基準が違うため、いまだ大きな相違が存在しており、大別すれば「完全否定説」、「完全肯定説」、「保留性肯定説」の三つの学説がある。また、改土歸流の過程の研究について言えば、多くの論文があるものの、内容の重複する部分も少なくないと感じられる。たとえば雍正五年（一七二七）の鎮沅用兵、雍正六年（一七二八）の橄欖壩用兵、雍正八年（一七三〇）の鎮雄、烏蒙、東川の用兵は多くの論文がみな叙述するところである。もちろん改土歸流の重大な事件として、これらに触れざるをえないことは確かであろう。ただし雲南滞在の間、鄂爾泰はこれら以外にも多くの施策を行っているにもかかわらず、それらについての研究はきわめて少ないのが実情である。なお、近年中国においてこのような「政治を重視し、経済や文化を軽視する」研究方向はすでにある程度変化してきていることを指摘しておかなければならない。改土歸流の以外の角度から鄂爾泰を研究する論文も絶えず出現しており、少数民族への対処に触れているものもあるが、それも大体中央の辺境政

策の角度からであり、鄂爾泰の少数民族観や措置については依然として大きな研究の余地がある。また、文献の利用について、上述の研究は皆鄂爾泰の奏摺の一部分だけを使っており、間接史料を多く利用する論文も少なくない。したがって、これまでの研究に基づきながらも、鄂爾泰の親筆奏摺を主な研究文献として、彼の雲南経営における少数民族観念と政策を研究することには意義がある。

三、研究史料

(一) 鄂爾泰に関する主要な文献

鄂爾泰は清初の名臣であり、彼に関する清代史料はけつして少ないとはいえない。その中で、鄂爾泰の略歴については『清史稿』¹¹に列伝があり、『清史列伝』¹²中にも専伝がある。両者の記録内容を対比すると、取捨した内容と詳しさには異同がある。さらに彼についてもっと詳しい伝記史料としては鄂容安が編集した『襄勤伯鄂文端公年譜』¹³がある。この年譜を収録している中華書局点校本『鄂爾泰年譜』¹⁴は、付録の部分に鄂爾泰に関するその他の資料十一篇を収めており、その中に右で言及した『清史稿』及び『清史列伝』の鄂爾泰伝も含

まれている。それ以外に、『清実録・世宗憲皇帝実録』及び多くの地方志の中にも、鄂爾泰についての記載が少なからずあり、また今人の研究としてはたとえば『清代人物伝稿』¹⁵がある。しかしながら、これらの資料と比べても、直接鄂爾泰について理解するには彼の多くの親筆奏摺及びそれに対する雍正帝の硃批が最も重要な史料といふべきである。

奏摺は康熙期にすでに現れていたが、大量に使用されてひとまとまりの厳密な制度を形成するのは雍正時期である。雍正帝は奏摺を通じて地方の官吏を直接統制することを試み、そのために朝野の大臣と地方の官吏が奏摺を定期的に提出することを要求し、そして一つ一つを閲読して指示を与えた。雍正帝の寵臣の一人として鄂爾泰は在任期間、特に雲南滞在の間、西南経営の状況に関して数多くの奏摺を書いた。鄂爾泰の奏摺の数量について、台北故宮博物院宮中檔に現在所蔵されている鄂爾泰の奏摺の原物は三百三十四件であり、『硃批論旨』¹⁶に選んで収録されているもの、すなわち「已録」奏摺は二百八十九件である。それ以外に、『掌故叢編』、『史料旬刊』に収録されているものが二十件余りある。現在、これらの奏摺は主に『硃批論旨』、『宮中檔雍正朝奏摺』、『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』¹⁷に収録されている。

(二) 『硃批諭旨』、『宮中檔雍正朝奏摺』、『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』の比較

雍正期の奏摺について論及するには、『硃批諭旨』、『宮中檔雍正朝奏摺』、『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』に言及しないわけにはいかない。これらの間にはどのような違いがあるのか。そして、どのような関係があるだろうか。これら三者の詳細な比較検討を行った研究は、筆者の知る限り存在しない。そのため、ここで以下のように整理を試みる。

『硃批諭旨』、正式名称は『世宗憲皇帝硃批諭旨』である。雍正十年（一七三二）、世宗は特に数年来の硃批諭旨から精選し編纂せよとの命令を下し、それによって、大臣官吏を教育させ、庶民を訓導することを試みた。乾隆三年（一七三八）に印刷、刊行された。総計で臣下二百二十三人の奏摺七千件余り及び雍正帝の各奏摺に対する朱筆を収録している。奏摺は人名によって配列されており、奏摺が多い者は一人複数冊におよび、奏摺が少ない者は数人が一冊にまとめられている。『硃批諭旨』の版本はかなり多く、殿版、清刻本、上海点石齋石刻本などがあるが、版本に関わらず内容に出入りはない。ただ版本によって、分冊の数量が違い、清光緒十三年の上海点石齋石刻本は全書が六〇冊、その中で鄂爾泰の奏摺は

第二十五冊～第二十八冊の計四冊である。『硃批諭旨』は雍正時期における奏摺の全てではなく、これらの「已録奏摺」は総数の十分の二、三にすぎない。それとは別に「未録奏摺」と「不録奏摺」とがある。北平故宮博物院は一九三〇年に『雍正硃批諭旨不録奏摺總目』を出版した。さらに、「糾正錯誤」、「整齊格式」、「潤飾文字」及び「因忌諱而篡改」のために、『硃批諭旨』の内容は奏摺原物の内容と違う箇所がある。

『宮中檔雍正朝奏摺』は、台北国立故宮博物館の所蔵する雍正時期の奏摺を編年体で編集し、影印したものである。約千人の奏摺二万二千三百五十七件を収録しており、三十二冊である。そのうち前の二十七集が漢文奏摺、最後の五集が満文奏摺である。一九七七年～一九八〇年、台北国立故宮博物館によって出版された。

『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』は、中国第一歴史檔案館の所蔵する雍正時期の奏摺及び台北故宮博物館が出版した『宮中檔雍正朝奏摺』中の漢文奏摺を編年体にまとめ、二色刷りで印刷したものである。約千二百人の奏摺三万五千件を収録している。収録された奏摺の大多数は、皇帝の批示を経た後のものであるが、中にはまだ皇帝の批示を経していない『原摺』もある。皇帝の批示を経た奏摺のうちのいくつかは『硃批諭

旨』の編纂過程に形成された「誉清修訂摺」である。そのうち原物がまだ存在するものは原物の「付録」として編入された。それ以外に、『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』の最後の部分に五千余件の雍正時期における「朱筆引見單」と「履歴單」が収録されている。一九八九年～一九九一年、江蘇古籍出版社によって出版され、精裝四十冊である。

ここで明らかなように、三者のうち『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』に収録された奏摺が最も完備している。しかし『硃批諭旨』の出版が一番早いため、今まで最も多く研究に利用されている。代表的な研究は京都大學人文科學研究所の安部健夫と宮崎市定が中心となった「硃批諭旨研究班」によるものである。この研究班は一九四九年に創立され、一九七一年に終了するまで、前後二十数年続けられ、毎週一回の精読会で研究班の成員は共に『硃批諭旨』を読み、史料中の問題、例えば歴史事件、人物、法令制度などについて自由な討論を行った。その研究成果は続々と『東洋史研究』に発表された。一九五七年から一九六三年までに『東洋史研究』は四回の「雍正時代史の研究」特集号を発行し、一九八六年には東洋史研究会は上述の四号を合わせて編集した論文集『雍正時代の研究』を出版し、二十四篇の論文を収録している。同時

に研究班は『硃批諭旨』から索引カード十二万枚を作成し、一九八六年に『雍正硃批諭旨索引稿』を編集した。さらに研究班の終了後も、京都大学の東洋史学研究室では大学院演習のテキストとして『硃批諭旨』が引き続き使われていたが、台北故宫博物院の『宮中檔雍正朝奏摺』の出版後は『硃批諭旨』から『宮中檔雍正朝奏摺』に変わったという。『硃批諭旨研究班』に参加した経験を持つ楊啓樵は、自ら故宫博物院及び北京の中国第一歴史檔案館に赴いて原史料にあたり、雍正時期の奏摺に対して十数年の研究を行った。彼は研究成果を中国語と日本語でそれぞれ発表しており、例えば「清世宗竄改硃批——雍正硃批諭旨原件研究之一」（『錢穆先生八十歲記念論文集』香港新亞研究所、一九七四年）、「雍正帝及其密摺制度研究」（生活・讀書・新知三聯書店香港分店、一九八一年）、「北京と台北に所蔵されている『硃批諭旨』の異同」（『東方学』七十四卷、一九八七年）、「掲開雍正皇帝隱秘的面紗」（香港商務印書館、二〇〇〇年）などがある。同時に、台湾の莊吉発は台北故宫博物院が所蔵している原史料を利用し、一連の研究成果を世に問う。例えば『清代奏摺制度』（台北故宫博物院、一九七九年）、「故宮檔案述要」（台北故宫博物院、一九八三年）、「雍正硃批諭旨」（『歷史月刊』第二期、

一九八八年)、「默迂・厚顔・糊塗・頑蠢…雍正硃批諭旨常用語彙」(『故宮文物月刊』第一卷第二期、一九八三年)、「從鄂爾泰已錄奏摺談『硃批諭旨』的刪改」(『清史論集』文史哲出版社、二〇〇三年)などである。この二人の代表的な研究以外にも、雍正期の奏摺及び奏摺制度については、日本と台湾の研究成果が数多くある。一方、中国大陸の研究成果は数の点でも質の点でも、いずれも後れをとっている。紙数の制約に鑑み、また本文の主題からやや逸脱するため、ここではこの問題についてこれ以上述べない。

(三) 史料の利用

『硃批諭旨』は人名によって配列されているため、鄂爾泰の奏摺が比較的集中しており、閲読には便利である。二百八十九件の鄂爾泰の奏摺のうち、「附片」一件と「請安摺」九件を除くとすべて鄂爾泰が江蘇布政使、雲南巡撫管雲貴總督事、雲貴總督、雲南・貴州・広西三省總督を担任した期間に上奏報告した「地方事務奏摺」である。このうち圧倒的多数の奏摺が彼の雲南在任期間に書かれたものであるために、彼の雲南経営を研究する際の第一次史料となっている。しかしながら、『硃批諭旨』が編纂される過程で、奏摺の原物が

改竄された情況に鑑み、筆者の研究は『硃批諭旨』中の鄂爾泰の奏摺を手がかりとしながらも、奏摺の期日によって『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』を参照していきたい。その中で、少数民族に対する彼の態度及び政策に重点を置く。それから、必要な場合には西南地区の地方志史料を利用し、照合と実証を行っていききたい。

四、結びにかえて

以上、鄂爾泰に関する研究状況の総括と研究に用いられる史料の検討を行った。これまでも鄂爾泰についての研究成果はすでに多く、改土帰流、開拓苗疆、地方経営、少数民族統治、水利・経済・人身売買規正・社会改革について触れており、中でも改土帰流に関する問題に研究が最も集中している。しかしながら同時に、多くの改土帰流についての研究論文には内容の重複、及び利用されている史料が一次史料ではないという問題もある。鄂爾泰に関する文献の中で、鄂爾泰の親筆奏摺及びそれに対する雍正帝の硃批が最も重要な史料といえるべきであり、これらは主に『硃批諭旨』、『宮中檔雍正朝奏摺』、『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』に収録されている。こ

の三者の編纂の経緯および特徴、三者の相違に関しては、本文中で対比し、明らかにしたところである。この中で『硃批諭旨』が最も早く出版されたため、これまで最も多く研究に利用されているものの、現在では『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』に収録された奏摺は最も完備しており、本書が今後の関連する研究にとって最も重要かつ全面的な史料集成であるといえる。筆者の今後の研究においてはまず、これまでの先人の研究の上に立って、『硃批諭旨』中の鄂爾泰の奏摺を手がかりとしながらも、奏摺の期日によって『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』を参照し、鄂爾泰の少数民族に対する呼称を整理したいと考えている。そしてそこから彼の少数民族に対する観点を抽出することを試み、さらにはそれに基づいて、彼の少数民族に対する政策についても検討を行いたい。

註

- (1) 鄂爾泰の生年については一六七七年説もあるが、『中国大百科全書・中国歴史』、『中国歴史大辞典』等、本文では鄂爾泰の子鄂容安が編集した『鄂爾泰年譜』に従い、一六八〇年説を採用する。
- (2) 鄂爾泰の略歴については、『清史稿』（中華書局、一九七六年）卷二百八十八列伝七十五「鄂爾泰」、『清史列伝』（中華書局、一九八七年）卷十四「鄂爾泰」、鄂容安等撰『鄂爾泰年譜』（中華書局、一九九三年）など参照。
- (3) 「改土帰流」の実施方法については当時官僚内で論争があった。「剿」は武力で強引に進めるということであり、「撫」は穏便に収めるということであった。
- (4) 『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』二十一編、雍正九年十一月十日、高其倬奏摺中の諭旨。
- (5) 李世愉「清政府对雲南的管理與控制」、『中国辺疆史地研究』二〇〇〇年第四期、二五頁。
- (6) 紙面を節約するため、同じ論文と論著が再度出現する時、出所情報を付けない。
- (7) 『宮中檔雍正朝奏摺』、台北国立故宫博物院編輯、一九七七年。
- (8) 中国第一歴史檔案館編、『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』第八冊、雍正四年九月十九日、鄂爾泰奏摺、江蘇古籍出版社、一九八九年。
- (9) 楚雄彝族文化研究所編、『清代武定彝族那氏土司檔案史料校編』、中央民族学院出版社、一九九三年。
- (10) 秦中応、「建国以来關於『改土帰流』問題研究綜述」、『辺疆經濟與文化』二〇〇五年第六期、六十八—六十九頁。
- (11) 『清史稿』卷二百八十八列伝七十五「鄂爾泰」。
- (12) 『清史列伝』卷十四「鄂爾泰」。

- (13) 鄂容安等撰、李致忠点校『鄂爾泰年譜』、中華書局、一九九三年。
- (14) 清史編集委員会編、『清代人物伝稿』上編第九卷「鄂爾泰」、張捷夫撰、中華書局、一九八四年。
- (15) 莊吉発「從鄂爾泰已録奏摺談『硃批諭旨』的刪改」、『清史論集』文史哲出版社、二〇〇三年、九十六頁。
- (16) 楊啓樵「雍正帝及其密摺制度研究」、生活・読書・新知三聯書店香港分店、一九八一年、一百九十五頁。
- (17) 楊啓樵「雍正帝及其密摺制度研究」、二百十五―二百三十頁。
- この研究ノートを執筆するあたり、指導教員林謙一郎准教授よりいただいた温かい御教示にたいして、深い謝意を表します。

(ちょう さん 名古屋大学文学研究科博士課程)